

聖書箇所：ルカの福音書 6章 12～19 節

説教題：神に祈りながら

1 祈られるイエス

(1) 切羽詰まった祈り

12 節に、「このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた」とあります。ここには、夜を徹して神に祈られるイエスのお姿があります。私たちはこの12 節を読み、ただ何となく「イエスは祈りにおいても熱心なお方だったのだ」と思うだけで深く考えることはなく、そのまま次の場面に読み進んでいたのではないのでしょうか。

でもどうでしょう。私たちは一生のうちに徹夜で祈るという経験は何度あるでしょう。もしかして一度もしないかもしれません。でももし本当に徹夜で祈るということがあるのなら、それはかなり切羽詰まった状態に追い込まれたときのはずです。たとえば、愛する者が災害や事故に巻き込まれてしまって連絡が取れなくなり、安否がわからないままになっているとき。そんなときだれであれ、無事であることを祈られます。

イエスは夜を徹して祈られました。なにか切羽詰まった事情があるように思います。どんな事情であったのか。聖書はいくつかのヒントを与えています。

(2) 何度も祈っていた

大きく分けて二つのヒントがあります。一つはこの12 節の前までのことになります。イエスが祈られたという記事は実はここだけではない。12 節に至るまで、イエスが祈るという場面が既に二度出ていました。

一度目は4章42 節です。「朝になって、イエスは寂しいところに出て行かれた。」イエスが寂しいところで何をされていたのかは、ここには書かれていません。

イエスが寂しいところで何をされていたのかは初めてわかるのは、二度目の祈りの場面となる5章16 節に出会ったときです。「しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。」日本語訳では4章42 節の「寂しいところ」と5章16 節の「荒野」と言葉を違えて訳していますが、ギリシャ語のことばを見れば、どちらも同じことばが使われています。イエスが、寂しいところで何をしていたのだろう。そうかあそこで祈っておられたのだ。そんなふうに、イエスのお姿がじょじょに明らかになるようにルカは書いています。

そして今日の12 節の箇所。ただ祈っていたのではない。なにか真剣に祈っておられるようです。それも一度だけではなく、ずっと以前から何か大切なことを心に留めておられたようです。これが一つ目のヒントになります。

(3) 使徒を選ぶために

では二つ目のヒントは何か。13 節にあります。「夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。」一晩中祈り、夜が明けてからイエスがされたことは、十二使徒を任命することでした。イエスは十二使徒を選

ぶために、徹夜で祈っていたことになります。この日のためにずっと祈ってこられました。

なぜそこまで真剣に祈らなければならなかったのでしょうか。なぜかイエスは切羽詰まったようにして、なんども祈り続けています。どうしてなのか。謎のままです。この謎のことはまた後で触れることにして、そのまえに一つ、おそらく多くの方が引がかかっている問題について考えておきたいと思えます。

2 イスカリオテ・ユダ

(1) なぜ選ばれたのか

その問題とは、十二人の使徒の最後に名前が挙げられているイスカリオテ・ユダのことです。16 節に、わざわざ「イエスを裏切ったイスカリオテ・ユダ」と説明が施されています。私たちは、聖書を読んでいて、わからないことに何度も遭遇します。わからないことはいろいろあるけれど、その代表がこの問題でしょう。なぜイエスは、イスカリオテ・ユダをお選びになったのか。裏切ることを知らなかったはずはありません。ご存じの上でお選びになっています。

ある方はこんなことを言います。「ユダが裏切ることを知っていたながら、どうしてイエスは使徒の一人に選んだのだろう。もしここで選ばれなかったなら、ユダはイエスを裏切るなんていう罪は犯すことはなかったのではないか。イエスは、ユダに罪を犯させるようにと、わざと選んだのだ。ユダはかわいそうだ。」

おそらく皆さんも、このことをどう考えたらいかが整理がつかないままであろうと思えます。

(2) ユダの責任

イエスはユダに罪を犯させるために、わざと使徒に選んだのでしょうか。この疑問は、きちんと整理しておかなければなりません。というのは、もしそうだとするなら、私たちはこう言うてしまうことになるからです。

「私が、ほかの人の物を盗んだのは私の責任ではない。神は私に罪を犯させるために、私が欲しかったものをわざと目の前に置いたのです。悪いのは神であって、私ではありません。」

こんな子供じみた言い訳をしても通用しません。どんな結果であれ、自分がしたことは自分で責任をとらなければならない。それは、聖書の最初から最後まで一貫した大原則です。

ヤコブ書 1 章 13、14 節にこうあります。

「だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。」

ユダがイエスを裏切ったのは、イエスがユダを使徒に任命したからではありません。イエスにはいつさいの責任がないのです。ユダがイエスを裏切ったのは、あくまでもユダ自身が自分の欲に引かれ、おびき寄せられ、誘惑されたからです。ユダの責任です。

こう言われても、なお納得できないでしょうか。「確かにユダがイエスを裏切ったのはユダの責任かもしれない。でも、どうしてわざわざそんなユダを使徒に選んだのか。それがわからない。」

イエスには、ユダを選ばないということも可能でした。でも、そうしません。わざわざ

ユダを選びます。ユダだけではありません。他の十一人だってそうです。この十二人の使徒たちは、イエスの側近中の側近です。もし皆さんがイエスの立場ならどんな人たちを側近に選びますか。将来自分を裏切ったり、見捨てたりするような部下は選びたくありません。むしろ、どんな事があっても忠実に職務を全うしてくれる部下を選ぶ。それが常識です。

でも、イエスは私たちの常識をはるかに超えています。イエスは、大きな問題をかかえていた弟子たちをお選びになります。ご自分が十字架に上げられたとき、この使徒たちはいったいどこにいたのか。みんなイエスを捨てて逃げてしまう。イエスが墓に葬られて三日目、日曜日の朝、墓に向かったのは使徒たちではない。二人のマリアです。そのとき使徒たちはどこにいたのか。部屋に鍵をかけ、隠れていた。

ユダに至っては、銀貨三十枚でイエスを売り、祭司長たちがイエスを捕まえようとしたときには、先頭に立ち、だれがイエスであるかを密告していきます。

3 父なる神の御心に従うために

(1) なぜ祈られたのか

イエスがなぜ祈り続けておられたのか、なぜ夜を徹して祈らなければならなかったのか、おわかりでしょうか。イエスがこれから選ぶとする十二人の使徒たち。イエスが十字架におつきになるとき、イエスを見捨てて逃げ出し、自分のいのちを惜しんで隠れる使徒たちです。そしてイエスを裏切るユダです。

いったいなぜそんな人たちを選ぶのでしょうか。誰の御心だったのでしょうか。この十二人の使徒たち、イエスお一人でお選びに

なったのでしょうか。そうではありません。父なる神に祈り続け、父なる神の御心をお知りになり、御心のままにイエスが決断し、選ばれたのです。

13 節。「夜明けになって弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。」

弟子たちにとってこんな名誉なことはありません。今や、人生の頂点に上り詰めたような感激を味わっていたでしょう。これからの自分の将来は約束された。そんな明るい未来を夢見たでしょう。

しかしイエスはどうだったのでしょうか。イエスはこのとき何をご覧になっていたのでしょうか。先ほど、なぜイエスは切羽詰まったようにして祈り続けられたのか、その問題を脇に置いたままでした。

イエスがこのとき見ておられるのは、イスカリオテ・ユダに裏切られていく道です。十一人の使徒たちに見捨てられていく道です。イエスの目には、今、ご自分がこれから歩まなければならない道がくつきりと見えています。弟子たちは自分のことに浮かれ、何も気がつきません。イエスお一人だけが、向かうべき十字架のことを見ておられます。

どのような十字架ですか。父なる神から怒りの杯を飲まされる十字架です。父なる神から見捨てられる十字架です。やがてイエスはゲッセマネの園で、こう祈ります。「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」(ルカ 22 章 42 節)

そこまで祈らざるを得なかったほどの十字架です。イエスはそれでもなお、父なる神に従おうとされます。十字架の苦しみへと新

たな一歩を踏み出そうとします。

では父なる神は、このとき何をされていたのでしょうか。最後にその事に触れておきたいと思います。

(2) 大きな力がイエスから出ている

イエスは、使徒を任命してから山をくだります。待ち受けていたのは大ぜいの民衆でした。イエスの教えを聞きたいと願う者、病気を治してもらいたいと願う者、悪霊を追い出してもらいたいと願う者が、遠くからやってきていました。19節を読みます。「群衆のどれもが何とかしてイエスにさわろうとしていた。大きな力が出て、すべての人をいやしたからである。」

イエスは、ここまであちらこちらの町々を巡り、人々をいやしてこられました。ですから、イエスが人々をいやされたのはここが初めてということではありません。しかしよく見ると、これまでと違うことが一つあることに気がつきます。「大きな力が(イエスから)出ている」と書かれるのはここが初めてです。これまでイエスは、人々に手を触れて病をいやしてこられました。あるいは、みことばをお語りになっていやされました。ところが、人々がイエスの衣に触れただけでいやされるということは、今までなかったことなのです。

どうして、イエスのみからだから大きな力が出るのでしょうか。神のひとり子であるからということではありません。それだけではありません。今まで見てきたことことから、もう一つのことを言えます。イエスは、父のみこころにかなうようにと使徒を選び出し、任命したと言いました。その事はひとえに、ご自分が十字架に向かわれることを今までより

ももっとはっきりとさせることでもあったと言いました。

父なる神はそのようなイエスをどのようにご覧になっていたのでしょうか。何もせずに、高いところから見ていただけですか。いいえ、父なる神は、イエスに力を注ぎ、励ましてくださっていたのです。その結果、多く人たちの罪が赦され、多くの人たちの病がいやされていきました。そのような順番になっています。

私たちは、イエスから大きな力が出ていることを見て、ただ「すばらしい」と驚いていました。しかし、もっと深いところにあるイエスの御思いを知りたいと願います。

イエスをご自分の歩まれる道をますます狭くされていきます。十字架に向かうしかない、そのような道をあえて選んで行かれます。何も感じないはずはありません。一步進むごとに苦しみも増していく道行きです。

すべては私たちのためでした。私たちを救うためでした。イエス父なる神に従順に従われたことにより、何も知らず、何もわからない、神がどれほど苦しまれていたのかさえ理解しない、そんな私たちが救われていくのです。

この方が使徒を選ぶとき、どれほどの苦しみを味わっておられたのかは何も語りません。ただ黙々と、悲しみをうちに秘めながら進んで行かれます。そのような主のお姿をもういちど仰ぎ見たいと願います。